

講座提供型学習機会における受講生の学びに関する一考察

生津 知子

Consideration on the Learning of Adult Students
in the Provisions of Private Institutions for Lifelong Learning

Tomoko NAMAZU

1. はじめに

本論は、生涯学習の機会がさまざまな形で広がってきた今日、個々人が経験する「学び」の実際やメカニズムに注目することで、学習スタイルが多様化する中でも通底する学びの内実と可能性を再検討しようとするものである。本論では特に、提供者側によって企画・運営される学習場面に個人が参加する形で展開される「講座提供型」の学習機会をとりあげ、そこでの「学び」の様相を具体的に考察することを目的とする。

近年の日本において、「生涯学習」は、言葉としても実際の活動としても、ある程度定着したものとなっている。2005年5月の内閣府「生涯学習に関する世論調査」（以下、「世論調査」）では、約80%の人が、生涯学習という言葉で「聞いたことがある」と答えている。前回の調査（1999年12月）では74%、前々回の調査（1992年2月）では64.5%であったことを考慮すると、ひとまず、「生涯学習」はひとつの言葉として確実に認知されてきていることがいえよう。活動の実施状況に関しては、言葉の周知度には及ばないものの、「人々が、生涯のいつでも、どこでも、自由に行う学習活動のことで、学校教育や、公民館における講座等の社会教育などの学習機会に限らず、自分から進んで行う学習やスポーツ、文化活動、ボランティア活動、趣味などのさまざまな学習活動」と定義される「生涯学習」を、「この1年くらいの間に、…したことがあ」という人は、全体の半数近くにのぼっている¹⁾。

では、このように国民の約半数が行うとされる生涯学習は、どのようなかたちで行われているのか。「世論調査」によると、まず、「同好者が自主的にを行っている集まり、サークル活動」と「公民館などにおける都道府県や市町村などの自治体の講座や教室」が、各々33.1%、31.1%とほぼ同じ割合で最も多く、以下、「自宅での学習活動」（25.1%）、「カルチャーセンターやスポーツクラブなど民間の講座や教室」（24.3%）、「パソコン・インターネット」（16.3%）などが続いている（複数回答）。

ここで注目したいのは、「同好者が自主的にを行っている集まり、サークル活動」や「自宅での学習活動」、「パソコン・インターネット」など、人々が自発的・主体的に行う活動の割合が高い一方で、「公民館」や「カルチャーセンターやスポーツクラブ」の「講座や教室」といった「講座提供型」の学習機会も、日本における生涯学習活動の主流となっていることである。これらは、提供者側が講座や教室の企画・運営を行い、人々はそれら既成の学習機会の中から自

らのニーズに見合うものを選び取り、参加する形で展開されるものである。

講座提供型の学習機会については、講座提供機関に関する情報や、講座数や受講者数などの統計的データも広く入手可能であり、従来、このようなデータを用いた研究や新たな実態調査なども行われてきた。この意味では、講座提供型学習の全体像は、比較的つかみやすい状況にあったともいえる。だが、その中で、「学習＝講座の受講」という前提が一定程度共有され、「学習＝誰かに教えてもらうこと」という矮小化されたイメージが一部に定着してきたことは否めない。それゆえ、成人教育研究においては、このような講座提供型では、受講する側の能動性が確保されにくいなどの指摘がなされる傾向にあったといえる。

他方、講座提供型に関しては、活動場面で受講生が実際にどのようなことを経験し、どのようなことに興味を覚え、どのようなことに意義を見出しているかというような観点からの実態把握、実践研究などはあまりなされてこなかったように思われる。講座提供型の学習機会では受講生の能動性が確保されにくいという議論の妥当性および是非の検討は別の機会に行うものとし、本論では、このような受講生の学びの内実に注目していきたい。

以下、講座提供型が主流となっている生涯学習事業の中でも、営利事業体であるがゆえに、とりわけ受講生の「学習」としての活動実態にあまり目が向けられることのなかったカルチャーセンターをとりあげる。まず、カルチャーセンターの全国的な特性について検討し、次に、A市のBカルチャーセンターの全体状況を概観する。さらに、参与観察によって得られた2つの講座の事例から、受講生が講座の中で行う活動の様相をとらえ、講座提供型の学習機会の実態について具体的に考察したい。

2. 生涯学習機関としてのカルチャーセンター²⁾

2-1. 全国調査にみるカルチャーセンターの特性

カルチャーセンターは、『広辞苑』(第五版)によると、「主に社会人を対象とした教養講座」と定義される。1974年に開設された朝日カルチャーセンターが成功をおさめた後、都市部そして地方に続々と設置され、1980年代には「カルチャーブーム」と呼ばれる黄金時代を迎えた。バブル経済が崩壊した1990年代からは、全体として低迷状態が続いているというものの³⁾、「世論調査」からも明らかなように、民間企業が提供する生涯学習機会として一定程度普及していることは間違いないだろう。

長年カルチャーセンター業界を研究してきた瀬沼克彰は、カルチャーセンターを次の4つの特徴で叙述している⁴⁾。①営利を目的とした学習施設、②趣味、文化、スポーツなどの多種目の講座編成、③多数の不特定の人々を組織、④講師は大部分が外注、事務職は専任スタッフを配置。以下、この定義を視野に入れた上で、全国調査からカルチャーセンターの全体的な特性をとらえていきたい。

2002年の経済産業省「特定サービス産業実態調査」によると、カルチャーセンターは全国に693事業所あり、そのうち、「新聞社」系列のカルチャーセンターが22.8%、「カルチャーセンター専業者」が19.6%、「百貨店・量販店」系列が10.7%、「放送局」系列が9.8%となっている。また、事業所数を都道府県別にみると、東京が11.5%と最も多く、以下、兵庫(7.4%)、愛知

(7.1%)、神奈川 (5.8%)、大阪 (5.6%) と大都市を抱える都道府県の割合が高い。カルチャーセンターは都市部に集中する傾向がいまなお強いことがうかがえる。

カルチャーセンターののべ講座数は、13万9千講座であり、そのうち合唱・カラオケ・社交ダンスといった「趣味・けいこごと」の講座が56.7%と半数以上を占め、次いでテニス・バレーボール・ゲートボールなどの「体育・レクリエーション」が17.0%、外国語・文学・歴史といった「教養の向上」が14.4%となっている。一方で、環境問題・国際情勢・経済問題などのいわゆる現代的課題を扱う「市民意識・社会連帯意識」の講座は0.4%と非常に少ない。瀬沼の定義の②にあるように、人々のさまざまな学習ニーズに対応した講座内容の多様さはカルチャーセンターの特性のひとつといえるが、反面、社会的に必要とされる講座の展開は今後の課題だといえる⁵⁾。なお、各カルチャーセンターが抱える講座数は、「10以上49講座」のカルチャーセンターが全体の28.0%と最も多く、次の「50以上99講座」(17.0%)をあわせて全体の約5割を占めている。さらに、「300講座以上」を有するカルチャーセンターが14.1%と続く。

職員に関しては、就業者数6万4千人のうち、「臨時雇用者」の割合が82.7%と圧倒的多数を占めている。一方で「正社員、正職員」は3.5%にとどまる。これは、定義の④にあるように、カルチャーセンターにおいては、講座の企画・運営が、少人数の常勤スタッフと大多数の非常勤講師から成り立っているためである。カルチャーセンターでは主として、少人数の常勤スタッフが講座を企画し、大部分を占める非常勤講師は、実際の講座内での活動にのみ従事するのである。なお、常勤スタッフの多くは、教育ビジネスに従事するオフィスワーカーと位置づけられており、教育の専門家というわけでも、講座の企画・運営に関して専門的な訓練を受けているわけでもない。

受講生に関しては、定義の③で「多数の不特定の人々」とあるように、カルチャーセンターでは、老若男女を問わず学ぶことが可能である。だが、「特定サービス産業実態調査」をみると、207万人の個人会員の男女比は約1：5（171万人：36万人）と女性の割合がかなり高い。さらに、50代以上の女性会員が全体の約5割（101万人）を構成している。カルチャーセンターに関する先行研究では、当時の実証的なデータを引用し、カルチャーセンターを「主婦のけいこごとの場」としてのみ捉えることに異論を唱えるものもあるが⁶⁾、少なくとも「特定サービス産業実態調査」の結果をみる限りは、50代以上の女性の層がカルチャーセンターの受講生の主流を形成しているといっていいただろう。なお、のべ受講者数は746万8千人で、「趣味・けいこごと」の受講者数の割合がのべ講座数と同じく半数を占め（50.1%）、「体育・レクリエーション」が27.0%、「教養の向上」が12.9%と続く。

最後に、瀬沼の定義では第一に挙げられていた、カルチャーセンターが営利事業体である点について言及しておきたい。営利事業であるということは、利益を得ることが重要な事業目的となる。「特定サービス産業実態調査」によると、カルチャーセンターの主な収入源は「受講料収入」であり、その全体の年間売上高600億円のうち87.0%と大部分を占めている。実際の受講料は、60分あたりの平均を、「1000円以上1500円未満」(37.1%)、「500円以上1000円未満」(32.9%)と設定するカルチャーセンターが、あわせて全体の約7割を占めている。これらの受講料は、低価格や無料の講座を提供する公民館や各地方自治体の生涯学習センターに比べる

と高いといえ、1990年代以降のカルチャーセンター低迷の主たる要因ともなっている。

では、以上のようなカルチャーセンターの全体的な特性を念頭に置いた上で、筆者がフィールドワークを行ったBカルチャーセンターの事例をみていきたい。

2-2. Bカルチャーセンターの概況

筆者は、2004年7月1日から2005年3月31日にかけて、A市のBカルチャーセンター（以下、「Bセンター」と表記し、一般的なカルチャーセンターを指す場合と区別する）においてインターンシップ活動を行った。期間中は、主として週に1、2回、午前9時から午後6時までを勤務時間として、Bセンターの日常業務を担うほか、講座の見学やインタビュー調査などの研究活動も行った。本節では、そこでの体験をもとに、Bセンターの様相を概観しておきたい。

Bセンターは、人口100万人以上のいわゆる「大都市」とされるA市の、駅から徒歩数分程度のビルの一角に5つの教室を構える。2004年度4月から6月までの時点で、常時10名程度のスタッフが勤務し、Bセンターを経営する企業の社員や派遣スタッフに加え、受講受付時など一定期間のみ雇われるアルバイトから構成されている。また、同時点での会員数およびのべ受講者数はともに1500名程度であり、どちらも男女比が1：3、50代以上の層が全体の7割以上を占めるなど、カルチャーセンターの全国的な特性とほぼ同様の傾向を示している。

パンフレットに掲載される講座数は170程度であり、歴史・文学・語学・美術・音楽・ダンス・創作などのジャンル別、および入門・中級・上級などのレベル別にわけられている。内容別の割合は、前述の「特定サービス産業実態調査」の区分に従えば、「趣味・けいこごと」が全体のほぼ半数、「教養の向上」が4割弱と、この2つではほぼ全体の9割を占める。一方、教室の制約もあってか、全国的には一定程度の割合を占めていた「体育・レクリエーション」は5%程度と少ない。講座の期間としては、1日限定のものもあるが、ほとんどは1回につき1時間半から2時間の授業が月に1、2度のペースで運営され、3ヶ月をひとつの区切りとしている。また、各々の講座の受講者数は、4、5名程度の小規模なものから40、50名にもおよぶものまでさまざまであるが、受講希望人数が一定数に満たない場合は開講されていない。なお、Bセンターにおける1時間あたりの受講料は、「1000円以上1500円未満」の講座が全体の半分以上を占め、次いで「1500円以上2000円未満」が約3割、「2000円以上」が約2割弱となっている。Bセンター全体で平均すると1500円程度であり、全国的な平均からみて決して安いほうではない。

講座内容は、Bセンターのスタッフが、インターネットや各種メディア、書店などでさまざまな情報収集を行った上で決定する。その際、同時並行的に、その講座内容に適切だと思われる講師探しをする。講師が依頼を承諾すれば、正式に講座として成立する。以降、講座の具体的な内容や学習形態および学習方法などは、各講師によって決められており、スタッフはほとんど関与していない。

講師のタイプは、大学教員、「カルチャー系」の講師、系列会社・提携企業の職員の3つに大別できる。大学教員とは、普段は大学で教鞭をとっている講師であり、文学や歴史といった「教養の向上」の科目を担当する 경우가ほとんどである。「カルチャー系」の講師とは、カルチャー

センターや公的な学習機関などを主な活動の場としている講師であり、主としてダンスや音楽、創作活動といった「趣味・けいごと」「体育・レクリエーション」の講座を担う。系列会社・提携企業の職員とは、文字通りBセンターを運営する会社の系列および提携企業の職員であり、職業上で高めた専門性を生かして講座を担当する。自社（の製品）を宣伝する目的も兼ねたものといえる。

講座の形式は、Bセンターでは主として学習内容によって異なる。大別すると、講義形式、ゼミナール形式、実習形式の3つであるが、ほとんどの講座は、講義形式か実習形式となっている。

講義形式とは、学校教育の教室内でみられるような、教師（講師）が前に立ち、それに向き合う形で生徒（受講生）が並んでいる形式である。この形式では、主に講師が講義をし、受講生はそれを聞いている。Bセンターでは、ほとんどの「教養の向上」の講座でとられている形式である。ゼミナール形式は、ロの字やコの字型など、講師と受講生が対等に向き合うことに配慮して机が配列される場合が多い。この形式では、全員で意見を出し合い議論するなど、受講生が講座の進行に積極的に関わってくることが想定されている。Bセンターでこのような形式がとられるのは、講座の受講人数にもよると思われるが、全体としてかなり割合は少ない。実習形式とは、講師と受講生と一緒に体を動かしたり、作品をつくったりする形式である。講師は、教室全体を見渡しつつ、受講生ひとりひとりの進行状況にあわせたアドバイスを行う。主として「趣味・けいごと」「体育・レクリエーション」の講座でみられる形式である。

このようにBセンターでは、系列会社や提携企業のリソースを活用した講座からその独自性がうかがえるが、講座内容や受講者の比率などに関しては、全国的なカルチャーセンターの特性とほぼ同様の傾向を示しているといえる。以下、講義形式と実習形式の講座の事例をとりあげ、各々の講座における受講生の活動の実相を具体的に考察する。

3. 参与観察記録・インタビュー記録にみる受講生の学び(1)－Cさんの場合

第三章と第四章では、Bセンターにおいて主流となっている、「カルチャー系」の講師による実習形式の講座と、大学教員の講師による講義形式の講座から、それぞれ一事例ずつとりあげる。講座への参与観察記録、講師・受講生へのインタビュー調査記録を参照しながら、それぞれの講座の具体的な流れと、その講座を受講するCさんとDさんの学びのメカニズムを検討していきたい。なお、本論における講座名は、実際のもので大きく趣旨が外れない範囲で変更を加えている。

3-1. 「カルチャー系」の講師による実習形式の「絵画教室」

「絵画教室」は、1回2時間（13時半～15時半）、月に2回の頻度で開講されている。E講師（女性）は、これまでも断続的に絵画を教えることはあったが、子育てが一段落した数年前、本格的に「カルチャー系」の講師として仕事を始めた人である。

筆者が参与観察した2005年2月7日には、20名程度（うち男性は3名のみ）の受講生全員が出席していた。教室内はあらかじめスタッフによって机が4つのグループに分けられて配置さ

れており、教室に入ってきた受講生からそれぞれ好きな場所に座って授業が始まった。

同日は、それぞれ持参したリンゴの絵のデザインが行われた。受講生が思い思いのデザインで絵を描く中、E講師は、常に教室全体を見回し、必要があれば個別にアドバイスをした。受講生の多くも、自分の近くにE講師が来たときには、積極的に質問をしていた。たとえば、筆者の「参与観察記録」によると、以下のようなやりとりがたびたび見られた。

一人の男性受講生が、「先生、こういうのはどうでしょう？」と自分の作品を見せる。E講師、「いいですよ。今日はデザインの勉強なので、なんでもあります」と答える。さらに全体に、「今回はそれで自分が完成だと思ったら完成です」と言う。その後、「すすまない」「できない」と言う受講生には、作品を見て「いいじゃないですか」「いいですよ。思ったことを描いてくださって」と、とにかく褒めて励ます⁷⁾。

多くの受講生が大まかなデザインを描き終えた頃、E講師は、「頭がいっぱいになった方は、ちょっと席を立ててみてはどうですか？ 頭が柔らかくなりますよ」と呼びかけた。それをきっかけに、1人2人とほかの人の作品を見て回るようになり、教室は、次のような状態になった。

教室内をうろうろする人が増え、50分には、ほとんどの人が席を立ててほかの人の作品を見て回っている。受講生は、「いや～すご～い」「きれいに描いているね～」などお互いの作品をしきりに褒めあったり、「私も絵のタッチが濃くて…」などお互いの共通点を言い合ったりして、教室はかなりにぎやかになる。その状況を見て、E講師は、「みなさん頭やわらかくなりました？ 自分の作品って、ほかの人が見ると面白いんですよ」と言う⁸⁾。

こうして当日の授業は、受講生が自分の作品にタイトルをつけ、他の受講生に紹介するという形で締めくくられた。このように、「絵画教室」では、講師の指導からはじまるわけではなく、まず受講生の個性が尊重されていることが特徴的であった。また、受講生同士がお互いの作品を鑑賞しあうことが奨励され、それぞれのよいところを共有化することが積極的に試みられていたといえる。

3-2. 「絵画教室」を受講するCさんの学び

主婦業のかたわら、さまざまな習いごとを数年程度継続してやってきたというCさん（女性）は、Bセンターの「絵画教室」も2年ほど続けている。Cさんは、この講座で絵を描くことを初めて習ったというが、前述のように講師の指導が前面に出てくるわけではない同講座のすすめ方を、どう感じているのだろうか。

それ（絵を描くやり方―筆者）は、先生が指導してくださるのを自分で感じ取ったものです。ここでは講義とかはいっさいないんです。先生が「スケッチをなさい」というこ

とで、みなさんとにかく目の前にあるものを描くんです。それを先生が見て「ここはおかしいよ」とか、修正してくださるんです。それを、「あ、ここがおかしかったのか」というのを自分で気づくのを先生は待っているんですよ。先生は最初から「こうして、ああして」という既成概念を絶対植え付けません。だから、みんな自由にやってて…でも間違いは正してくださるので、「ああそうか」と。それで少しずつステップしてるんだと思います⁹⁾。

Cさんの発言からは、E講師の指導に依存する様子はいかがえない。むしろCさんは、いざとなったらE講師がアドバイスをくれることを全面的に信頼するものの、「既成概念を植え付けない」というE講師の教え方を敏感に感じ取り、まず自分で考え、気づくことから学ぼうとしているといえる。

さらにCさんは、以下のような形で、絵を描くようになって生じた自らの変化を述べた。

…最初の頃、これ（講座で習っている絵画—引用者）は日本画の手法だということを教わったんです。（中略）それからは、自分の絵の参考として、日本画の本を見たりしています。自分で暇のあるときとか、本屋さんに行ったときとか。月に2回、2時間、ここへ来て体置いているだけでなく、いつも頭の隅っこのほうに気がけていて、「次のモチーフの時には、こういうものを描こうかな」って考えていますね。「夏だからこれ描こうかな」とか、「そろそろすいせんの季節だな」とか、「そのときは誰の絵を真似しよう」とか（笑）。あと、（中略）自分が書くことによって、他の人が書いた絵をその人の立場にたって見ることができるようになったんです。「苦勞して描かれたんだな」とか、「なかなかこういう風には描けないわ」とかいうのが、つかめるようになったんです。すごい楽しいですよ¹⁰⁾。

このようにCさんからは、絵画を習い始めたことで視野の広がりを感じ、授業時間内にとどまらずその活動を楽しんでいる様子がうかがえる。しかし、筆者が、「ずっと続けていると、どこまで極めようかという気になりますか？」と尋ねると、Cさんは、「それほど興味はない」ときっぱりと言い切った。続けて、「楽しめて健康によければ…『自分に投資する』という感覚ですね。」と答え、自分が「絵画教室」を受講するスタンスについて次のように述べた。

ただぼーっと暮らすのではなくて、ひとつちょっとアンテナを出して、それに関連するところを見たり…ハリがあるでしょ。生活にハリがでて面白いと思うんですよ。（中略）まあ細く長く続けばいいかなと思って…みんなもボケ防止にいいって言ってやってるんですよ（笑）¹¹⁾。

Cさんは、絵を描く技能を高めるということに関しては、「楽しめて健康によければ」という割り切った態度をとっている。Cさんはむしろ、絵画を描くことを通じて、生活世界におい

て視野が広がっていること、自身の生活全般が充実してきていることを実感しており、そこに絵を描く意義を感じとっているといえる。

このように、Cさんは、絵を描く技法を「教えられる」だけではなく、日本画の本や「著名な画伯」の作品、E講師や他の受講生の作品など、外界のリソースを、自らが絵を描く行為と関連付けながら積極的に活用し、楽しんでいる。すなわち、Cさんの学びは、単に絵を描く行為のみならず、それを基点として広がるさまざまな世界との相互作用をも含むものだといえる。

4. 参与観察記録・インタビュー記録にみる受講生の学び(2)－Dさんの場合

次に、講義形式の講座における受講生の学びをみていきたい。講座提供型の学習機会の中でも特に、講義形式の講座においては、受け身の受講生像がイメージされる傾向が強いといえるが、実際はどのようなのだろうか。

4－1. 大学教員による講義形式の「アジアの歴史」

「アジアの歴史」は、1回1時間半(15時半～17時)、月に2回の頻度で開講されている。同講座のF講師(男性)は大学教員であり、大学で教鞭をとる傍らカルチャーセンターで教えて十数年になる。現在も、Bセンターのほかに、いくつかのカルチャーセンターで教えている。受講生は、筆者が参与観察した2005年1月27日には20名程度(3分の2が女性)であり、講師と対面する形で並べられた机に着席していた。

「アジアの歴史」は、既存の成人教育研究の観点からすれば、極めて「学校化された」講座だといえるだろう。授業は、F講師の「起立・礼」という号令で始まり、ビデオやスライドを用いた、板書しながらの講義が中心であった。受講生は、配られた大量の資料を見ながらF講師の講義に耳を傾け、熱心に板書を書き取っていた。ときおり、F講師の「いちにの、はい」という掛け声とともに、全員で文献が音読されたりもした。

さらに授業終了時には、F講師から、次のようにして宿題が出された。

F講師は、講座の最後に、「世界最大の漢字字典の名を4字で」など、ホワイトボードが一杯になるくらいの宿題を出す。F講師の研究室に、郵送もしくはFAXで提出とのこと。受講生は宿題の内容を一生懸命メモする。F講師、「100点の人はおみやげあるよ～」という¹²⁾。

その後、F講師によって採点された前回の宿題が受講生に返却されはじめた。その際、F講師からは、宿題を提出した「ご褒美」として、アジア地域の地図をカラーコピーしたものを、さらに「100点」をとった人には、別途、同地域のきれいな風景写真が手渡されていた。宿題は強制ではないようだが、毎回、少なくとも半数以上の受講生は提出している様子であった。

ではなぜ、F講師は、受講生のほとんどが中高年層というカルチャーセンターであえてこのような教育形式をとるのか。筆者は、宿題を出す理由をF講師にたずねてみた。するとF講師は、次のような形で自らの意図を述べた。

できるだけ、目的のある時間を与えてあげたいというのがありますね。2週間に1時間半の授業だけでは、あとの長い時間を過ごすのが大変でしょう。そこで、宿題を出すと、2日くらい図書館に行くでしょ。あと、宿題は、必ず採点してあげることになっています。必ず評価してあげないとやる気なくなっちゃうから。一方的に宿題出して受け取るだけじゃなくて、必ず「ここは間違ってますよ」とか、「これは正しい」とか、「100点です。よくできました。この次もがんばってください」とか一筆書いてあげる。そうすると、希望がわいてくるからね¹³⁾。

このようにF講師は、受講生が学びを広げていくきっかけとなるよう宿題を課し、それを評価することによって受講生に励みを与えているととらえている。実際、宿題を渡し終えた後の教室内では、間違った箇所を見直したり、何人かで集まって結果を話しあうなど、全体的に宿題に対する関心が強い様子もうかがえた¹⁴⁾。本調査では、このような受講生に対し、直接に話をきく機会をもてなかったのだが、「絵画教室」におけるCさんの事例から推測すると、このような受講生は、F講師から「教えられる」知識を獲得することによってのみ学んでいるのではなく、他の受講生や図書館員、文献などの外界のリソースを選び取り、それらを活用すること、そしてそこから得られた知見を宿題内容と関連付けることで学んでいると考えられる。さらにF講師によると、それらの知見を講座内容とも照らし合わせ、F講師に「この点がわからない」とか、「このあたりをもう少し詳しく教えてください」といった「いろいろな要望」を投げかけるにまでいたるのだという¹⁵⁾。

しかしここで、同講座では宿題というツールが個々の受講生の学びの基点になっていると考えられるものの、この宿題は決して強制ではない。同講座の受講生が宿題をしないという選択をした場合、彼らの学びはどのように考えればよいのだろうか。Dさんへのインタビュー記録を手がかりに、考えてみたい。

4-2. 「アジアの歴史」を受講するDさんの学び

会社を1年前に退職し、次に打ち込めることを探している最中だというDさん（男性）は、もともと山登りなどが趣味で「アジアの歴史」講座を受講していた。インタビュー時、Bセンターのような「講座」を受けた経験もほとんどなく、「アジアの歴史」も受講し始めたばかりだというDさんであったが、長年企業内研修の担当をしていたこともあり、学びに関しては一定の価値観をもっているといえる。

まずDさんは、筆者が前述のように展開される「アジアの歴史」の感想を求めると、「若い頃だったら、『あんなの受けたくはない』ってなってしまうかもしれないけれど、まあそんなことはない。」と笑いながら答えた。講座の感想をあいまいに述べるDさんに対し、筆者が、「実際講座に行ってみて、思っていたのと違う…ということですか？」と尋ねると、Dさんは、「今回はまだ許せる範囲だったから」と笑いつつ、「もっと強制的にやらされたりすると…例えば『宿題は絶対』とかだったら、無理だったかも知れないね」と言う。Dさんは、F講師の個性や教え方に決して満足しているわけではなく、宿題も積極的に取り組もうとしているわけで

はないが、「確かに、アジアの歴史に関してはものすごく詳しい」と、同講座に参加したこと
の意義についてはある程度納得したようすをみせているようであった¹⁶⁾。

Dさんは終始、「結局（講座というものは一筆者）受けてみないと中身はわかりませんよ
ね。」と割りきった態度をみせていた。これに対し筆者が、「自分でお金を払って時間を割いて
講座に参加している受講生なわけですが、『もっとこうしてほしい』といった自分の要望を強
く主張されないのはなぜですか？」と尋ねると、Dさんは次のような形で、「講座で学ぶ」と
いうことに対する、自らの認識を述べた。

おっしゃることはよくわかるけど、（中略）受ける側が自分の希望を満たしてくれるよ
うに…ってというのはあんまり考えられないですね。自分が希望の範囲を抑えるとかし
か…。基本的には「与えられているもの」でしょ。「こういうセミナーがあって参加どう
ですか」という風にやるものだから。だから、自分の希望を満たそうとするなら、自分が
何かを絞って決めるか、自分自身がやるしかないわけですよ。それで、希望が満たされ
ない分は、別のセミナーに出るとか、図書館で本を読むとかすることで補う。要するに、
セミナーというのは、自分の思いのうちの「一つ」を実現するものだと思いますね。もち
ろん人によっては、一つのセミナーで100%満たされるかも知れないけど。僕の立場から
言えば、100%ってというのはありえないですけどね。まあ何でもいろいろなことが関連し
ていますしね。（中略）「アジアの歴史」の講座だったら、地理的なこととか語学とか宗教
とかも知っていないといけない。…「アジアの歴史」の先生だって、地理学的山岳的なこ
とになるとご存じないかも知れないしね。その辺でちょっと優越感をもって話を聞いたり
しているんだけどね（笑）。要するに、機嫌良く受けるためには、自分自身の「聞き方」
「受け方」の問題ですよ。小さい頃は面白くないから学校に行くのはいやだったんだけ
ど、セミナーはそれではダメなわけですよ。興味を持って楽しく聞けるように、ある程度
自分も努力しないとイケない。そういう気持ちをもつことが大事だと思いますね¹⁷⁾。

「アジアの歴史」のF講師は、受講生が学びを広げていくきっかけとなるよう宿題を課し、
それを「評価」することによって受講生に励みを与えているとみていたが、おそらくDさんは、
F講師によるそのような働きかけを欲していないと推測される。長年企業内研修の担当をして
いたDさんはすでに、講師と受講生の関係性について「教える－教えられる」ものという固定
観念を抱いており、自ら講師との関係性をそれに限定してしまっていると考えられる。ゆえに
Dさんは、「講義形式の講座の受講生」として「教えられる」という役割をあえて意識的に演
じている。講義形式に対応できる「聞き方」「受け方」を身に付け、一方向的な教え方の講師
に「合わせ」ながら、ときに「優越感」すらもって講義を聴くのである。

ここで、その中で感じる学びの限界性を、Dさんは次のように克服しようとする。すなわち、
Dさんにとって、一つの講座で「100%」満たされることは「ありえない」ので、他のセミナー
に参加したり、図書館で本を読んだりする機会をつくるのである。Dさんにとって「アジアの
歴史」は、Dさんの学びをかたちづくる基点というよりも、あくまでも自らが学ぶ手段の一つ

であるといえる。Dさんの学びは、同講座とその他のリソースとを相互補完的に組み合わせた一連の実践の中で形成されているのである。

5. おわりに

本論はあくまで事例研究であることを考慮しつつ、Bセンターにおける受講生の学びについて考察するならば、受講生にとって学びとは、決して提供される講座の中で完結するものではなく、むしろ、彼らを取りまくあらゆる人・モノ・出来事との相互作用を通じて発展していると指摘できよう。その際、「人・モノ・出来事」というのは、図書館であったり、関連する文献であったり、他の受講生であったり、他のセミナーであったりもする。それは、講座内の人間や、講座の時間や、講座が行われている場所や、講座内で用いられる資料に限定されるものではない。

もちろん、講師もこの中に含まれるのではあるが、彼らが受講生の学びにおいて絶対的な方向付けを行うわけではない。本論で確認した事例においてはむしろ、受講生の側が、自らの学びの状況に即したかたちで、必要とされる講師との関係性を見極め、選び取っていたといえる。また、講師の側も、ただ学習内容や技能を教えるだけでなく、受講生どうしが学びあうための環境を整えたり、受講生が学びを広げるための情報や素材を提供したりすることなどの役割を意識的に果たしていたといえる。

このようにみていくと、Bセンターにおける受講生の学びは、ただ提供される講座内容を受容するという枠組みの中でのみとらえられるものではないことがわかってくる。たとえば「講義を聴く」という一見すると受け身的な行為も、受講生の学びをかたちづくる上で必要な要素のひとつとして、受講生自身が選び取ったものという観点からとらえ返していく必要があるだろう。

以上、Bセンターにおける受講生の学びについて考察してきたが、Bセンターに限らずほとんどのカルチャーセンターでは、スタッフの果たす役割も非常に重要な位置を占めている。彼らは、講座の開発を行い、カルチャーセンター全体としての方針をもって講師と頻繁なやりとりを行っているのである。この点に関して本論では、個々の講座に即した考察を行ったため、言及することができなかった。これらについては特に、第二章でふれたような、カルチャーセンターの営利事業としての側面と関連づけることで、カルチャーセンターを総体としてとらえることを可能とするように思われる。今後、講座提供型の学習機会全体を視野に入れた上で検討をすすめていきたい。

【謝辞】

調査にご協力いただきました、Bセンターのスタッフのみなさま、講師のみなさま、受講生のみなさまに、この場をかりて御礼申し上げます。

- 1) なお、1999年の「世論調査」についてはすでに、渡邊洋子が詳細な分析を行っており、生涯学習の実施状況の結果に対して「『だれでも、いつでも、どこでも』という段階には至っていない」ことを指摘している（『生涯学習時代の成人教育学』明石書店、2002、pp. 18-21）。今回の調査でも、同項目についてはほぼ同様の結果を示しているが、本論は、それでもなお半数という一定程度の割合で生涯学習が行われている現状をふまえ、その具体的な活動形態に注目していくものである。
- 2) これらについて詳しくは、生津知子「生涯学習機関としてのカルチャーセンター——先行研究および関連調査の動向から——」（『男女共同参画』『異文化共生』を展望する『趣味・習いごと』プログラムの研究』報告書（研究代表者：渡邊洋子）、2006年刊行予定）を参照のこと。
- 3) 山本思外里『大人たちの学校』中公新書、2001、pp. 108-135など。
- 4) 瀬沼克彰『企業文化の展開』大明堂、1986、p. 172。
- 5) なお、公民館（類似施設も含む）における講座内容の構成比は、まず「趣味・けいこごと」（37.0%）が最も多く、続いて「教養の向上」が21.8%、「体育・レクリエーション」が14.4%と、ほぼカルチャーセンターと同様の傾向となっている。一方で公民館では、「市民意識・社会連帯意識」が5.8%と一定程度の割合を占めている（2002年文部科学省「社会教育調査」より。同調査によると、公民館は全国に1万9千館あり、のべ講座数は35万4千講座となっている）。
- 6) 山本慶裕「生涯教育機関としてのカルチャーセンター——その教育的特性に関する考察——」（『東海大学文明研究所紀要』第7号、1987）。
- 7) 生津知子『インターンシップの記録』未公開、2005、p. 153。
- 8) 同上、p. 153。
- 9) 同上、p. 214。
- 10) 同上、p. 216。
- 11) 同上、p. 217。
- 12) 同上、p. 137。
- 13) 同上、p. 171。
- 14) 同上、pp. 20-21。
- 15) 同上、p. 171。
- 16) 同上、pp. 208-209。
- 17) 同上、pp. 209-210。